

優良賞

奥尻町立奥尻中学校 2学年 高橋 利穂
言葉



皆さんは最近、心に残るようなドラマを見たことはありますか。私は今まで、数えきれないほどのドラマを見てきました。その中で、とても心に残っている作品があります。なぜそのドラマが心に残っているのかというと、言葉についてとても考えさせられたからです。

その作品には、耳が聞こえない青年が登場します。その青年は繊細な気持ちを手話で伝えていました。耳が聞こえなくて、声を出すことができなくても、想いを伝えることができる。言葉があれば、想いを伝えることができる。私はこの作品を見て、言葉には大きな力があると改めて思いました。

普段の生活の中で、言葉は意識せずとも口にするものです。皆さんは深く考えずに、思ったことをすぐ口に出していませんか。その言葉は知らず知らずのうちに人を傷つけているかもしれません。また、自分のわかりやすい言葉ばかりを発していませんか。その言葉は誰にでも通じる言葉だとは限りません。皆さん、今一度、言葉の使い方を見直してみませんか。

これから、「言葉の使い方を見直す」ということについて二つの提案をしたいと思います。

一つ目は「言葉を口にする前に一度考えてみること」です。

私が小学生の頃、嫌なことや面倒なことがあると、すぐに「死ね。」という人がいました。その言葉の対象は物事だけではなく、クラスメイトにも向いていました。嫌いな人に対して、陰で「死ね。」と言っているのも、何回か聞いたことがありました。私はその言葉を聞いて、「本当に人が死んでしまったらどうしよう。」と、とても不安になりました。実際、誰も死ぬことはありませんでしたが、人に向けられた鋭利な言葉がとても怖かったことをよく覚えています。

言葉には大きな力があります。その力は人を助けたり、励ましたりします。しかし、時には人を傷つける大きな凶器にもなります。言葉を発するときは、相手がどう思うか、傷ついたり、苦しんだりしないかを考えてから口に出すべきです。言葉は人を傷つけるために存在しているわけではありません。

二つ目は「誰にでも伝わるように言葉を選ぶこと」です。

私が通う学校の生徒同士はとても仲がいいと思います。一緒にいる時間が長いので、誰がどんな人間なのかを、お互いによく知っているのでしょう。そんな間柄だから、生まれる言葉なのでしょう。

ある日の朝、体調が優れないのに登校した人に、「お前もう帰れよ！」と言った人がいました。その人のことを心配していたのか、周りの人に移すくらいならば、帰った方がよいと思ったのかは私にはわかりません。しかし、近くで聞いていた私は決していい気分にはなりません。そして、同時に「お前もう帰れよ！」という言葉のほかにも違う言い方があったのではないかと思います。

このような場合、体調が優れないときは自分の体調を第一にすることが大切です。そして、その人に対しては、「もう帰れよ！」と突き放すのではなく、「今日は帰って休めばいいんじゃない？」などと伝えればよいと思います。自分の思っていることを伝えるのは難しく、誤解を生んでしまうことも多くあるでしょう。そんなときは誰にでも伝わる言葉を選び、口調や態度に気をつけて、伝えたいことを伝えればよいと思います。

言葉がこの世界に存在していなかったら、自分の思いを誰かに伝えることはできません。言葉は人と人を繋ぐためにあると私は思います。そんな言葉の使い方を見直して行

動に移せば、日常の生活がさらに豊かになると思います。そして、人との関係もよくなることでしょう。私は言葉によって傷ついたり、苦しんだりする人が減り、あたたかい人間関係が築かれていくことを願っています。